

カトリック 仙台教区報

No.254

2024 年 7 月 7 日

発行：カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12

Tel. (022)222-7371 Fax. (022)222-7378

発行責任：仙台教区広報委員会

URL <http://sendai.catholic.jp/>



霊の導きに従ってまた前進しましょう

5月19日(日)霊降臨の祭日に、元寺小路教会にてガクタン司教による

11人の堅信の儀がささげられました。

この日のミサは、最初にベトナム共同体の青年たちによって、入祭の歌が歌われ、

第1朗読はベトナムの女性がベトナム語で、第2朗読は日本人が日本語で、

福音はイグナシオ神父が日本語で朗読しました。

共同祈願も各国語でささげられ、拝領祈願の後で、ベトナムの14人の青年男女が

花束を両手に持ち、祈りの歌で静かに踊りました。

ガクタン エドガル司教は、説教で次のように話されました。

第1朗読「使徒言行 2・1-11」が語った聖霊降臨は、ユダヤ教の過越祭から50日目に祝われるもので、五旬祭と呼ばれている大きなお祭りに起こりました。これは、旧約聖書では「七週祭」と言われている「刈り入れの祭」でした。パレスチナ地方でよくとれる小麦、大麦、ブドウ、イチジク、ザクロ、オリーブ、ナツメヤシ、いわゆるイスラエルの7つ産物の一つである小麦の収穫を祝う祭りでした。次第に、小麦の収穫を祝い、神に感謝するこの祭に、ユダヤ人の歴史意識における基礎的な出来事に由来する宗教的な意義が吹き込まれました。その出来事とは、この民がエジプトでの奴隷化から解放された後、シナイ山で神と自由となった民とが契約が結ばれました。ユダヤ人は五旬祭の時、大麦の収穫を感謝すると共に、神との契約を記念し、神の掟を守る約束を更新するのです。「あなたがエジプトで奴隷であったことを思い起こ

し、これらの掟を守り行いなさい」(申命記 16：12)。

春の前半と重なる七週間は、日本でも花粉症の時期に当たるのです。花粉が無ければ、夏と秋においしい果物が取れません。春という季節中、花が咲いて、授粉が起き、まるで乾燥と暑さ、冷たい嵐という気候が戦っているようです。この自然の活発さが、神様自身のお働きであり、そのおかげで収穫の時期が訪れます。このように考えると、大地の実りに対して唯一の神への感謝を表す五旬祭といった祭の意味が全人類に通じているような気がします。

今、この祭壇上には、7本の赤いローソクが立てられています。それぞれには、「上知、聡明、賢慮、勇気、知識、孝愛、主への畏敬」という文字が書かれています。これが、聖霊の7つのたまものといわれているものです。教会の要理は、この恵みについて、このように、私たちに教えてくれています。「聖霊の恵みによって、私たちは神の勧めに喜んで、素直に従うようにさせてくださる」と言っています。



ベトナムの青年たちによる祈りの踊り

第二朗読で、パウロが書いたガラテヤの教会へ宛てた手紙（5・16-25）に、「霊の結ぶ実とは愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です」ということばが読まれました。例えば、小麦とイチジクという材料によっておいしいお菓子ができるように、聖霊の賜物から愛、喜びなどが作られる、聖霊の賜物と実りをそのように例えて理解しています。

堅信を受ける兄弟姉妹は、イエスの教えや信仰の意味が、信者としての生活をしていると、次第に分かってくるでしょう。すなわち、聖霊は、イエスの教えを、私たちにもっと深く理解させてくださるし、イエスの言葉をどう生きるべきかを示唆してくださるからです。

これから、堅信を受ける兄弟姉妹は、今日集まっている兄弟姉妹と心を合わせて信仰宣言を唱えます。私たちの共同体は神と結ばれる共同体、新しい契約の民です。聖霊がいわば教会の帆を張らせて、教会を船のように出港させてくれます。こんな弱い私たちに、働きかける神の霊は、息、風、炎など、いろいろなことばで表現されています。どんなに訳されていても、聖霊の豊かな働きを十分言い表すことはできません。見えない神の働きが、季節の乾燥と暑さ、冷たい嵐や、雨、太陽といった気候の要素のように私たちの

人生を实らせてくださるのです。ですから、使徒パウロは、信徒たちに「わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう」、と促すのです。

聖霊降臨の後、諸国からエルサレムに集まっていた巡礼者たちが「わたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは」、と不思議に思っていました。自分の言葉で神のお働きを理解したという出来事は、旧約聖書にあるバベルの塔を思い出させるのです。完成しつつある塔が人間の技術の腕の見せ所であり、誇りでもありました。さらに、人々が世界の言葉を一つにするまで力をかけました。これは、支配者と従属者の関係を表す人間の愚かさ、偶像礼拝と等しいものです。これとは逆のことが、聖霊降臨で起こりました。弟子たちは自分たちのことばで、イエス・キリストが救い主であることを、話しました。使徒たちの言葉が、みんなに理解できたのです。私たちも、いろいろな言葉に耳を傾ける必要があります。（例えば、聖体拝領後のベトナム人の感謝への祈りは、踊りと言う身体言葉で表現されました。私たちの共同体には、言葉がたくさんあり、それを理解する賜物を願いましょう。）



聖霊の7つのたまものを表す7本の赤いローソク

堅信を受ける時、みなさんの額に香油を塗ります。私たち信者がキリストの香りを漂わせているものです。私たちから漂う愛、喜びなどをおして。言うまでもなく私たちは

は弱い人間です。これからの歩みにいろいろなことがあるでしょう。福音朗読にあるように（ヨハネ15・26-27、16・12-15）、イエスが父のもとから弁護者が遣わされるのを述べられます。「弁護者」は、同伴者、助け主、慰め主、応援者とも訳せるようです。要するに聖霊が必ず、働きだします。祈りの言葉が口から出せない時、「聖霊、私に来てください」、と言う祈りは十分な祈りです。



第1朗読はベトナム語で



この日、堅信の秘跡を受けた11人とガクタン司教様、イグナシオ神父様

初めてのアド・リミナ

教会法には、「教区司教は、使徒座の定めた様式及び期日に従い、5年ごとに自己に委ねられた教区の状況について教皇に報告書を提出しなければならない」と「教区司教は、ローマ教皇に報告を提出する年には他に使徒座の定めない限り、使徒ペトロ及びパウロの墓参のためローマに赴き、教皇に謁見しなければならない」、いう規定があります（第399条1項と第400条1項）。この司教の義務は「アド・リミナ」として知られています。私たち日本の17司教は、今年の4月4日から13日までアド・リミナ訪問を行いました。コロナ禍などのため、9年ぶりの日本司教団の訪問で、私にとって初めてのアド・リミナでした。



教皇フランシスコに謁見した日本の司教団

司教区を委ねられた3人の大司教と14人の司教は、去年の春から報告書を準備し始めました。報告書は大きく分けて三つの部分から成っていました。それは、2015年から2022年までの教区の総括紹介、委員会・部会の報告、教区の展望、という見出しで、それぞれに数字や変化などが含まれていました。この報告書を作成するために、私は、事務局の職員、数人の司祭、シスター、信徒の協力を請いました。去年の9月上旬、英語で書かれた報告書を教皇大使へ送りました。その後、司祭月例会で2回にわたって、司祭たちに報告書の内容を私またはその部分を準備して下さった司祭（シスター）が紹介しました。報告書の受領は、福音宣教省の初期宣教部門の副長官ルイス・アントニオ・タグレ枢機卿から知らせて頂きました。日本カトリック中央協議会のホームページにこの省庁は次のように紹介されています。「東方教会省が管轄する東方典礼カトリック教会の管轄地域を除く全世界での宣教とその体制に関する根本的な問題に取り組み、初期の宣教と新しい部分教会への同伴と支援に当たる。教皇が長官として直轄し、2つの部門の責任者を副長官が務める。初期宣教部門の下に教皇庁宣教事業が置かれる。」

アド・リミナ最初の4日間にわたって、私たち司



教皇様と握手をかわすガクタン司教

教と同行司祭が教皇庁の各省庁を訪問し、それぞれの省のトップである枢機卿の長官や次官が私たちを歓迎してくださいました。全ての長官またはその代理者の歓迎の挨拶には共通点があり、それは、司教としての務めを助けるために教皇庁の各省庁が存在する、ということでした。今回、3回目のアド・リミナを経験された東京大司教区の菊地大司教は、教皇庁で起きている変化を東京大司教区報に次のように綴りました。「以前は、居並ぶ省庁高官の前に裁かれるために引きずり出されたような雰囲気があった省庁訪問でしたが、雰囲気が変わりとても友好的に対話ができる省庁が増えたように感じました。」

訪問のハイライトは、4月12日（金）午前、教皇宮殿にある教皇執務室で行われた教皇フランシスコとの謁見でした。謁見の前に、私たちは聖ペトロの墓でミサを捧げました。ミサの後、私たちが謁見の部屋に案内されている間、大きな団体が教皇との謁見の真っ最中でした。それでも、私たちを出迎えてくださった教皇の顔には疲れが見えませんでした。一人一人と握手を交わし、人間味あふれる歓迎の言葉「よくおいでになりました。お手洗いは横の部屋にありますよ、私たちは人間ですからね」で私たちを笑わせてくださいました。教皇様は、日本の教会のことについていろいろと質問をされ、該当の司教が答えました。事柄によって、教皇様から示唆や具体的なお話をいただきました。教皇と過ごしていた1時間以上をとおして強く実感したのは、教皇の傾聴・対話の姿勢と内なる喜びでした。謁見の最後に、教皇様は司教たち全員にこうおっしゃいました。「喜びを失わないように、そしてユーモアの感覚も失わないで。……喜びに満ちていないキリスト者は悲しいキリスト者だと言われますから」。

アド・リミナを終えて、教会のあり方としてのシノドス「共に助けあって歩いていく」仙台教区への奉仕にこれからも励んでまいりたいと思います。

除去土壌の再生利用について

—— 5月27日・仙台教区司牧奉仕者のつどいでの報告 ——

5月27日(月)、第1回「司牧奉仕者のつどい」が行われた。

これは、これまでは「月例会」と言われていた仙台司教区で奉仕する司祭だけが対象であったものが、今回から、信徒宣教者も参加するときは、この呼称にすると決まったものである。

第1回目は、福島県の被災地訪問という形で行われた。今回は、信徒宣教者としてはクレア・サンチェスさんのみの参加であったが、全員で24人での被災地訪問であった。

特に、福島原発の除染で出た除去土壌の再生利用についての問題についての講演は、参加者の心を打ったものであった。



大平山霊園の慰霊碑の前での祈り



幸田司教様の講演(双葉町産業交流センター)



廃炉資料館で学びました



廃炉資料館の黒いフレコンバッグ(ダミー)の前で



原町教会で祈りました

2011年の原発事故後、福島県内各地では、放射線量を下げするために除染作業が行われました。除染で出た除去土壌(汚染土)の入った大きな黒いフレコンバッグが山積みされている仮置き場の様子は異様でしたが、福島では見慣れた光景でした。しかし、今ではそれを目にすることはほとんどありません。それらが運ばれた先は中間貯蔵施設という場所です。福島第一原発の敷地を取り囲む大熊町・双葉町の広大な地域(帰還困難区域)がそれに充てられています。この中間貯蔵施設は2015年に運用が開始されましたが、30年以内に「県外」に運び出し、最終処分するまでの「中間」的な施設だと法律で定められています。しかし、この膨大な量の除去土壌を移動させる福島県外の場所のめどはまったく立っていません。

あまりにも量が多いので、国(環境省)は、1kgあたり8,000ベクレル以下の比較的放射線量の低い除去土壌は再生利用しようと考えています。それは除去土壌全体の約4分の3にあたる量です。道路工事の際に除去土壌をシートで覆い、道路の下に埋めて、その上に盛り土すれば放射能が漏れ出すことはないと言われています。同じように土を盛った上で植物を栽培する計画もあります。実際に福島県飯舘村長泥地区でこの実証実験が始まっています。この実験は福島県内だけでなく、環境省が管轄している東京の新宿御苑や埼玉県所沢市の環境研修所でも行う計画でした。しかし、周辺住民の反対のため、実際には行うことができていません。長泥地区の元住民も決して喜んで受け入れたわけではありません。

飯舘村の大半の地域で避難指示が解除された中、長泥地区は帰還困難区域のまま取り残されました。帰還を望む住民たちは、この地域を除染してもらうという交換条件のもとにこの実証実験を受け入れる苦渋の決断をしたのです。東京電力の原発が起こした事故による汚染土壌を福島県内だけで再生利用するというのは、どう考えてもおかしな話ですが、そうなるという恐れがあります。

事故を起こした福島第一原発の廃炉完了の見通しも、そこに残る使用済み核燃料やデブリ、その他の汚染物質の行き先もいまだにまったく見えていません。ALPS処理水(トリチウム汚染水)を福島県の海だけに海洋放出している問題も同じですが、東京電力福島第一原発の事故が引き起こした放射能汚染の問題を、福島の人だけに押し付けるのはあまりにも酷なことではないでしょうか。この問題は決して福島だけの問題ではなく、日本中の人が考えるべき問題であるのに……。

わたしは8年前に東京教区から来て、福島県浜通りの教会とカリタスで奉仕してきました。震災と原発事故から13年が経ちましたが、この地の抱える問題はなくなっていない。原発事故は過去の出来事ではなく、今も進行中の出来事です。わたしのミッションはこの福島の人々と共に居続けることであると、最近ますます強く感じています。

仙台教区第5地区浜通りブロック担当
一般社団法人カリタス南相馬代表理事
東京教区名誉補佐司教 幸田 和生

日本カトリック女性団体連盟 第50回総会・創立50周年仙台大会開かれる

日本のカトリック女性が築き、作り上げた50年

5月7日(火)～8日(水)、仙台司教区カテドラル・元寺小路教会において、全国各地の教会から集まった女性約150人の参加者が、熱心にこの2日間の総会と研修に励んだ。

〈1日目〉

5月7日の午前中は、日本カトリック女性団体連盟(以下日力連)の理事会が行われ、午後1時から第50回総会が開催された。まず、出席者全員が立って、シノドスの祈りを唱え、日力連の歌を歌い、心ひとつに一致し、祈りを唱えた。



左からガクタン司教様 阿部正子会長 山野内司教様

その後、阿部正子会長が、ガクタン エドガル仙台司教区司教、日力連顧問司教・山野内倫昭司教への感謝と、元会長2人、韓国女性団体から7人の参加者の方への感謝が述べられ、創立以来50年、絶えず祈りながら、相互に助け合い、多くの人に広く教会を示すように、働いてきた。聖母マリアの助けを願いつつ、各教区の中で、神の愛を伝える信仰に導かれるよう願っていると挨拶した。

続いて、日力連顧問司教・山野内司教は、この任に委ねられてから、この会のアイデンティティは何かということを考えてきた。アド・リミナの時、パチカンでベロニカの像に会いに行った。大変動的なお姿の像。彼女は、イエスの十字架の道行の時に、イエスの苦しむ姿を見て、思わず走り寄って、イエスの顔を拭って差し上げた聖人である。自分のことも顧みず、苦しむ人々に寄り添っておられる皆さんの働きのような、と挨拶された。

定時総会では、2023年度活動報告と決算報告・会計監査報告、2004年度の活動計画案が賛成多数で承認された。

新役員として、会長は熊本カトリック女性の会のジョンソン田口伸子さん、3人の副会長は、茨城カトリック女性の会の鈴木みどりさん(再任)、同じく茨

城カトリック女性の会の木村伊都子さん(新任)、大分県カトリック女性連合会の東富子さん(新任)が、出席者全員の大きな承認の拍手によって決定した。

その後、新たに選任された、新役員と、世界カトリック女性団体連盟副会長とソウルカトリック女性の会の出席者を阿部会長が紹介し、各新役員が抱負を述べた。韓国からの出席者の温かい感謝の言葉と活動が紹介された。

第2部は加盟団体連盟の代表が、各自の活動報告を活発に行った。加盟団体は、11団体あるが、札幌地区・奄美が欠席、他の9団体の活動発表が行われた。団体によっては、長崎大司教区のように、女性部という立場で、女性はすべてこの部に所属し、活動しているという大所帯もあれば、長年の活動の休止から、やっと息を吹き返した団体まで、いろいろな女性グループがあるが、カトリック教会は、この女性たちの活動があつてこそ、という感を強くした報告の数々であった。

第3部は歴代会長・顧問司教の紹介であつたが、特に今回は、3代目会長の名古屋の浜野房江さんと、5代目会長の福岡の山口紀子さんが元氣な姿を見せてくださり、元氣いっぱいの声で挨拶されたことは、全員が大喜びで手を振っていた姿が、この会の一致の絆を示しているようで、印象的であつた。

この日は、夕方から懇親会が行われた。

〈2日目〉

2日目は午前9時からロザリオの祈りで始まった。9時半からは、ガクタン エドガル仙台司教による基調講演「シノドスの教会になるために、私たち女性にできることは」が行われた。

基調講演

「シノドスの教会になるために、 私たち女性にできることは」

共に歩む教会になるために、私たちは何ができるか。この教会と共に一緒に歩むために、聖霊が私たちをどこに導こうとしているのか。このことを考えながら、共に歩こう、と始まった講演には、仙台市内の教会から多くの婦人たちも参加し、160人以上が熱心に耳を傾けた。

シノドスは「世界代表司教会議」といわれており、これまでの15回の通常総会と違い、第16回通常総会は、第1会期が2023年10月4日から29日まで、パチカンで開催された。これには、全世界から参加した司教や司祭だけではなく、多くの男性と女性信



徒がおり、会場も、パウロ6世ホールで、円卓をそれぞれのメンバーたちが少人数で囲む方式がとられた。今まででは考えられない進め方が、第2会期でも2024年10月2日から27日まで、バチカンで行われる。

第1会期の「まとめ」の報告書は、3部構成になっており、第1部は「シノドスの教会の顔」、第2部は「すべての弟子は、すべて宣教者」、第3部は「絆を紡ぎ、共同体を築く」で、その各部は「意見の合致点」「検討課題」「対話から生まれた提案」と分かれてまとめられている。

本日はとくに、この第2部の9項に取り上げられている「教会の生活と宣教における女性」というところを中心にお話したい。

まず、イエスと弟子たちの歩みを見てみると、有名なレオナルド・ダヴィンチの描いたイエスの「最後の晩餐」の絵の中には、女性の姿は描かれていない。最近の“THE TABLET”誌の表紙の「最後の晩餐」の絵には、女性も子どもも描かれているとPowerPointを見せながら語られた。

ルカ22:7～13を読むと、弟子たちだけで「晩餐」の準備をしたと書かれている。しかし、同じルカを見ると、8:1～3には、婦人たちがイエスと弟子たちの宣教の歩みを助けていたことが書かれている。またルカ24:13～35のエマオの弟子の1人の弟子の名前はクレオパと言われているが、もう1人の弟子の名前は書かれていない。これは、クレオパの妻ではなかったか、と言われている。ヨハネ19:25にイエスの十字架のもとに立つマリアと愛する弟子のほかに、クレオパの妻マリアと書かれているが、その人がクレオパの妻だという説もある。その他、使徒言行録の1章にも、婦人たちやイエスの母マリアと熱心に祈っていたということも書かれている。

アジア大陸のシノドスの会議で出された報告書のタイトルは「天幕の場所を広く取りなさい」ということであった。マタイのパンの奇跡の箇所でも、「女、子供を除いて、男が5000人だった」と書かれている。5000人以上の女性と子どもたちがいたと考えられる。天幕を、私たちも広げなければならない。

検討課題ということがあります。

世界中の教会が表明したことは、女性の積極的貢献が必要だと、認識されました。司牧上の必要により良く応えるためには、教会はどのようにしていけばいいのでしょうか。

提案として、主として、以下のことが「霊における会話」の実りとして挙げられた。

- 各地方教会は、さまざまな社会的背景の中で、もっとも疎外されている女性たちに耳を傾け、同伴し、ケアすることが奨励されている。
- 女性が意思決定過程に参加し、司牧活動と奉仕職において、責任ある役割を担うことができるように確約することが緊急に必要である。教皇は、教皇庁内の責任ある地位で働く女性の数を大幅に増やした。同じことが、教会の中でも行われる必要がある。などの具体性を帯びたことがシノドスで、討議され、提案として出された。

すべての弟子は、すべて宣教者

ローマ16:1-2に「ケンクレアイの奉仕者である、私たちの姉妹フェベを紹介しします。どうか、聖なる者たちにふさわしく、また、主に結ばれている者らしく彼女を迎え入れ、あなたがたの助けを必要とするなら、どんなことでも助けてあげてください。」と書かれている。

コリントの教会にいたフェベをローマの教会に紹介しているのである。このフェベは、「奉仕者」と訳されているが、ある聖書学者は助祭だったと言う。

使徒言行録に出てくる、ペトロが生き返らせたと言われている「タビタ」という女性は、多くのよい行いをし、貧しい人々を助けていた人であった。だから、人々が、亡くなったタビタのために、祈り、泣いていたのである。

このように、初代教会から、現代まで、多くの女性が教会のために奉仕してきた。だから、今、教会が天幕を広げ、多くの人を招き入れなければならない。天幕も広いが、イエスの心はもっと広いのである。女性の働きの方は、教会の中で、見直されなければならないだろうと女性たちを励ました。

派遣ミサ

11時から最後には大切な派遣ミサが荘厳に、しかし、活気をもってささげられた。主司式はガクタン・エドガル司教。共同司式司教・司祭は、山野内倫昭司教、イグナシオ・マルティネス師、千原道明師、レナト・フィリピーニ師、ハリー・オカロール師、バレラ・ミゲル師、エメ・ボルデュック師、ギャリー・ゲストベオ師、森田直樹師、愈鍾弼師、高橋昌師。

ヨハネ 15：7-12 をイグナシオ師が朗読した後、ガクタン司教は、「4月12日、日本の司教団は、1時間、教皇フランシスコに謁見するという恵みの時を過ごした。その中で教皇は、「いつも喜んでいなさい！ ジョイア、ジョイア、喜びをいつも伝えなさい。ユーモアのセンスを持っていなさい！」と言われました。

笑えないときもあるだろう。その時は、祈りなさい。絶えず、祈りなさい。「主よ、私はついて行けません。それでも待っています。主よ、私に理解する心をお与えください」と祈りなさい。

これが、私たちに向けられた言葉である。吟味して、識別しなさい。

私たちができることは「傾聴」である。私たちの主張を互いに聞くことである。そこで見つけたことを吟味しなさい。

今日、私たちが聞いた福音は、最後の晩餐で言われたみことばである。「わたしが愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と。

「愛」という言葉に3つの言葉がある。「エロス」—イエスはこの言葉を使ってはおられない。

「フィロス」—これは、互いに愛し合いなさい という時に使われている言葉である。

「アガペ」—神の愛

イエスは「私はあなたたちを愛していない」とは決して言わない。友のためにいのちをささげる愛である。

兄弟・姉妹の愛をもって、お互い同士、ていねいにやさしく話してください。そして互いが言うことに、よく耳を傾けてください。イエスの姿勢、イエスの生き方を見ることによって、私たちは、どうすればいいのかわかるのではないかと思います。

参加と交わりから宣教が生まれる、そのような集まりに感謝したいと思うと説教を締めくくった。

祈り、平和の挨拶、聖体拝領と主の恵みに満たされた。

派遣ミサの終わりに、山野内司教は、担当司教として、次のように語った。



私たちの総会は、ペンテコステではないか、と感じた。

アド・リミナの際の話だが、私は沖縄のウェイン司教が教皇に、「沖縄のことを忘れないでください。基地のことをぜひ伝えてください」とおっしゃると、この教皇様は頭がいいと思いました。教皇様は「私は沖縄のことをよく知らないので、あなたが書いて、私に送ってください。そうすると、私がそれを見て、サインをして、みなさんに発表します」とお話しくださいました。

続いて、本総会について触れ、東京教区と大阪教区から出席者がいないのはさびしい。その教区にはそれぞれ、婦人団体が活躍なさっている。私たちの会の活動よりも活発かも知れない。こちらの会のことも知らせることがあればよい。洗礼を受けた女性がすべて、心から喜んでメンバーになる必要がある。

群馬県には130人の女性がいるが、そのうちのフィリピン人や他の国籍の人々がいる。この人々も一緒に女性の会に入って活躍できるようになればよい、と希望を示された。

この基調講演、と派遣ミサの説教で信仰の熱が燃え、仙台が預かっていたペナントを次回の会長に引き継ぎ、第50回総会は閉会、解散となった。

その後、広瀬川殉教地巡礼と松島観光へのエクスカージョンが行われた。

日本カトリック神学院 開校ミサ

日本カトリック神学院は、これまで、東京カトリック神学院と福岡サン・スルピス大神学校で神学生の養成が行われていたが、このたび、二校の神学院が統合され、東京のカトリック神学院が、「日本カトリック神学院」として、日本で唯一の司祭を養成するカ

トリック神学院となった。その記念の開校感謝ミサが、同神学院で、5月9日執り行われた。

司祭召命のため、神さまに祈りましょう。ぜひ、「神父さまになりたい!」という心を若い人に燃え立たせてください、と神に願いをささげましょう。

ありがとう。盛岡ドミニカン修道院

盛岡市北部の上田松屋敷に北上川本流唯一の「四十四田ダム」があり、その美しいダム湖「南部片富士湖」の畔にたたずむドミニカン修道院。正式には「ドミニコ会・ロザリオの聖母修道院」で、さる5月5日の日曜日午前6時30分から盛岡ブロック担当司祭であるポール・トー神父様司式のもとで最後のミサが行われ、88年間の観想修道院の歴史に幕を下ろしました。



私たち盛岡のカトリック信者にとって「上田の修道院」は、四ツ家教会をはじめとする市内3か所の教会、130年以上の歴史をもつ盛岡白百合学園と共に、カトリック関連施設としてとても大切に誇らしい存在でした。やむを得ない事情があるとはいえ、とても残念な思いです。

観想修道院の性格上、信者でさえ直接交流する機会が少なかったにもかかわらず、ベルギー人修道女たちによって製法が伝えられたガレットやニクナックを通して、「ドミニカン」は盛岡の一般市民にも親しまれる存在となっています。幸いなことにこれらのベルギー風焼き菓子は既に福祉施設の事業として引き継がれ、「ドミニカン」の名称も残り続けます。

これまで修道女の皆様方にはいつも多くのお祈りをさせていただき感謝しかありません。

愛知県のドミニコ会聖ヨゼフ修道院に移られた後も、お元気で祈りの日々を過ごされますよう私たちもお祈りしたいと思います。

修道院の閉院にあたり、私たち盛岡の信徒に宛てて送られたメッセージを、後藤トミ修道院長様のお許しを得てご紹介させていただきます。

真山 重博（四ツ家教会）

盛岡の兄弟姉妹の皆様へ

百花春。

街には新しい一歩を踏み出した人々が花にも優ってあふれ輝いています。

皆さまには主キリストの復活の恵みのうちにお過ごしのことと思います。



ドミニコ会 ロザリオの聖母修道院 院長
スール マリア・ロザリア 後藤 トミ

さて、ご存じの通り私たちドミニカン・ロザリオの聖母修道院一同は当地での使命を終え、愛知県瀬戸市のドミニコ会聖ヨゼフ修道院と合併し移り住むことになりました。1936年（昭和11年）5月、遠くベルギー国ディナン市より6名の修道女がお導きにこたえて盛岡に到着。市内内丸で3年ほどの仮住まいを経て1939年（昭和14年）、当時蝦夷森（えぞもり）と呼ばれていた緑が丘に修道院を建立いたしました。大戦のためベルギー人の姉妹は善隣館に収監されるという辛い経験もいたしました。しかしやがて牛を飼い、畑を耕し、クッキーを焼いて生計を立てながら祈りの生活を送ることができました。創立から50年を迎えるころ、周囲の都市化や建物の老朽化などの支障が生じ、奇しくもこの松屋敷に土地を恵まれて移転。1986年（昭和61年）のことでした。美しい湖畔に38年を過ごした今、時の流れは私たちに実りを問いかけてきます。創立から88年、無力な私たちの拙い歩みは、すべて神様のお恵みと皆さま方のお力添えによるものであったことをあらためて深く思い巡らしております。そして心と声をあわせてたくさん「ありがとう」を申し上げます。聖ドミニコは「観想し、その実りを伝えなさい」と教えました。その観想とは、皆さま方とともに神様の計らいを味わうことであると思います。これまでの交わりは地下の深いところでつながり生き続けると信じます。多くの出来事や出会い、一つ一つが本当にもったいないことでした。それらは忘れることのできないお恵みとして私たちの中に、そして皆さまの中に残るでしょう。神様の言葉として留まるでしょう。いざ、新しいぶどう酒となって出発いたします！本当にありがとうございました。

ドミニカン・ロザリオの聖母修道院 姉妹一同
2024年4月

新「ローマ・ミサ典礼書」によるミサ実施に向けて〈その7〉

閉祭の儀

今回のミサ式次第の改訂にあたって、閉祭の儀の部分も豊かになりました。従来、派遣の祝福が一つしか掲載されていませんでしたが、今回の改訂によって、司教様の祝福の式や、さまざまな祝福の祈りが付け加えられました。また、ミサの締めくくりの言葉も豊かになりました。

司教様主式ミサの最後の派遣の祝福では、次のようなやりとりがあります。

司教「主は皆さんとともに」

会衆「またあなたとともに」

司教「主のみ名がいつもたたえられますように」

会衆「いまよりとこしえに」

司教「主のみ名はわたしたちの助け」

会衆「主は天地の造り主」

司教「全能の神、父と子と＋聖霊の＋祝福が皆さんの上にありますように」

会衆「アーメン」

司教様が訪問される時などに、上記のやりとりがスムーズにできるように慣れておく必要があります。

また、典礼季節や聖人の記念、種々の機会に唱えられる荘厳な祝福や会衆のための祈願も新しいミサ式次第には掲載されています。状況に応じて、これらの祝福や祈願が唱えられることによって、閉祭の儀を豊かにすることができるようになりました。

最後に、ミサを締めくくる言葉も3つ掲載されています。それらのうち「行きましょう、主の福音を告げ知らせるために」とか、「平和のうちに行きましょう、日々の生活の中で主の栄光をあらわすために」など、ミサと福音宣教、ミサと日常生活のつながりが意識された結びの言葉が加えられています。

これらの言葉に続いて、会衆は「神に感謝」と答えますが、ミサの恵みや日々の恵みに思いをはせながら、心を込めて感謝をのべ、新たに踏み出す日々を感謝のうちに生きることができるよう意識を新たにしていきたいと思います。

仙台教区典礼担当者 森田 直樹 神父

各地区からのお便り

第3地区より

〈宮城北部ブロック／古川教会〉
ラファエル神父様ローマへ
鈴木修さん10年振り洗礼・堅信式
そしてミゲル神父様着任

今年3月までの2年間、仙台教区第3地区の地区長で、石巻と古川の小教区を担当されておられたメヒア・タデオ・ラファエル神父様(Fr. Raphael)が、教会法の勉強のためローマへ留学されることになりました。先日の復活祭ミサ後のお祝いの後、さらに教会委員の有志が集まって神父様を囲む会を開きました。そしてお別れ、いやお別れではなく再会を誓って、「行ってらっしゃい」と皆で明るく神父様のお見送りをしました。



ラファエル神父様と

思えば、神父様はお若い方で何事にもエネルギーな方でしたので、神父様に背中を押されるように、この2年間で教会の雰囲気もそれまで以上により一段と明るく活発になったと思われます。神父様にとり、実りの多い留学となりますように。



鈴木さんに洗礼と堅信を授けたラファエル神父様

また復活祭には、古川教会で10年ぶりに鈴木修さんが洗礼・堅信式を受けられ、その式もラファエル神父様が留学前最後の司式をされました。教会では、神父様のローマ行と共に鈴木さんの洗礼・堅信という二重のお祝いとなりました。

そして4月の新年度から、一本杉・畳屋丁教会担当司祭だったヴァレラ・ミゲル神父様(Fr. Miguel)をお迎えしました。神父様は聡明な方で、とても親しみやすい紳士的な印象です。先日は、われわれにとって大変有名なキリストの誕生と復活、そして昇



ヴァレラ・ミゲル神父様と



ミゲル神父様の歓迎会で

天の後、集まっていた100人を越える大勢の信徒たちの上に、天から聖霊が降臨したという説教の中で、男性であっても女性であっても、年配者であっても幼児であっても、神の御前では等しいキリストの体的一部分であると説かれました。「私たち一人一人に、キリストの賜物のはかりに従って、恵みが与えられている」(エフェソ 4.7)と。我々の中の「違い」は、「差」ではなく「特性」である。そしてこの特性は、聖霊の賜物で、等しい神の恵みなのだと。

神は、時にわれわれに予期せぬ旅立ちや出会いを用意されますが、キリストが世の光としていつも私たちと共にいて、私たちの行く道を示してくださいように。

櫻井 清近（古川教会）

第4地区より

〈カテドラルブロック／元寺小路教会〉 ベトナム語のミサとマリア行列



5月はマリア様の月です。5月26日(日) 三位一体の主日に、ガクタン エドガル司教、イグナシオ・マルティネス神父、仙台教区のベトナム人司牧担当で第5地区のグエン・カオ・トゥリ神父と、仙台ベトナムコミュニティなど100人以上の方たちがルルドの前に集まり、花に囲まれたマリア様の像と一緒に「あめのきさき」を歌いながら大聖堂まで行列をしました。



聖堂に入るとベトナムの若者たちによる感謝の踊りがささげられ、参列者全員で手に持った花をマリア様の像に献花を行い、ベトナム語のミサが始まりました。



また、ミサ中にベトナムの方2人が元寺小路教会の聖体授与の臨時の奉仕者に任命されました。

これからも、皆が一体となって活気溢れる共同体になれるように祈るミサとなりました。

関 毅（元寺小路教会）

訃 報



スール アグネス 鷹觜 榮子（たかのはし えいこ） （聖ウルスラ修道会）

〈略 歴〉

1930年 6月 4日 誕生
1940年 12月 24日 受洗
1962年 4月 12日 入会
1965年 3月 25日 初誓願
2024年 5月 24日 帰天（満 93 歳）





高木 健太郎 神父から

フィリピン留学体験記2

仙台教区のみなさま、こんにちは。わたしは現在（5月末）セントルイス大学での勉強が終わり、マニラにある Maryhill School Of Theology にいます。ここは淳心会の設立した神学を勉強する学校です。他の修道会の神学生も勉強しています。淳心会の神学生は、セントルイス大学で英語、哲学を学び、ここで神学を学びます。



先生方と卒業証書記念写真

今回は、前回レポートから今日までの私の歩みについてお知らせいたします。私はセントルイス大学のEPP(English Proficiency Program)を晴れて卒業し、4月から2か月間、同大学のチュートリアルクラスに入りました。チュートリアルクラスとは先生と私だけのマンツーマンレッスンです。私個人に特化したクラスですので、時間中ずっと口を開けて英語を話している状態です。とても疲れましたが、さらなる向上へと実のある時間を過ごすことができました。



大学の仲間と

EPP、チュートリアルクラス、どちらも経験できて本当によかったです。EPPでは同級生から中国語、中国の文化を教えてもらいました。中国語は漢字が日本語と同じですし、発音も音読みで似ています。また、価値観や文化がとても似ています。

モンゴル人が一人、二学期から加わりました。モンゴルは文字についてはロシアの影響を大きく受けているものの、日本語と文法が一緒なことに驚きました（中国語文法は英語と似ています）。日本語は、

中国の文字を使って、モンゴルと同じ文法を使っている…とても興味深かったです。このように、比較言語学、比較文化論なども話し合われました。

侍者の子たち、大学のコックさんからは、タガログ語を教えてもらいました。私にはとても難しかったです。しかし、多くの出会いとまたとない機会なので、英語だけでなく、いろいろな言語にチャレンジしました。



「心の港」シルヴィーさん(左手前) 訪問

さて、本命である私の英語力ですが、日常生活で困ることがないレベルまで到達することができました。自分でも実感できた出来事がいくつかあります。一つ目は、4月後半に「心の港」のメンバーと一緒にシルヴィーさんがバギオを訪問してくれた時のことです。シルヴィーさんと普通に英語で会話ができました。また、大学構内を滞りなく案内しました。本当にうれしかったです。それと同時にレベルの維持、そして向上の必要性を強く感じたのでした。二つ目は、テレビの内容が理解できるようになったということです。ここまで来ることができたのは、大学の先生、同級生、神父様、多くの方々の助けによるものだとして深く感謝しました。さらに自分の中で特に印象的だったのは、中国人留学生の要望により、旧正月に淳心会の哲学院でミサをささげさせてもらえたことでした。大きな祝日を私に任せてもらえたこと、そして当初の目標の一つであった「英語ミサ」に到達することができたことは、大きな喜びでした。



中国人留学生、淳心会神学生と旧正月ミサ



十字架の道行きパレード



十字架の道行き登山
(十字架を背負っているのは筆者)

聖週間について書いておかなければなりません。とても長く濃い時間を過ごしました。聖週間は、特に集中して十字架の道行きを行います。聖水曜日の十字架の道行きは、大きな十字架を交代で背負いながら山登りをしました。急な斜面を登りながら、背負う大きな重い十字架が肩に食い込み、痛みと苦しみで足取りがふらつきました。イエス様の担った苦しみには及びませんが、一個人として、心に刻まれる体験することができました。また聖金曜日には、マーチングバンドを先頭に市内をパレードして盛大に道行きを行いました。ほかに様々な信心業を早朝から晩まで毎日行いました。フィリピンでは聖週間を、国を挙げてお祝いし、とても大切にされているのだということを実感したのです。

私は、もう少しフィリピンで勉強、経験して、仙台教区に戻ります。淳心会の神学生の中には日本への宣教を希望している神学生が何人かいます。彼らのためにもどうかお祈りください。そして、彼らと仙台教区で働ける日が来ることを私自身も楽しみにしています。



淳心会神学生

司祭派遣人事のお知らせ（第3次）

ガクタン エドガル司教は、2024年度、司祭派遣人事(第3次)を6月7日付で発表した。
実施は7月1日(月)より

2024年度（第3次）司祭人事異動

高木 健太郎（フィリピン留学） ▶新派遣地 第4地区 カテドラル・ブロック 協力司祭
(居住：元寺小路教会)

司 祭 紹 介

マチアス・アントニオ（エスコラピオス修道会）



- 生年月日
1966年6月13日
- 出身国
フィリピン マニラ
- 助祭叙階
2005年
- 司祭叙階
2006年2月11日
(京都教区 四日市教会)

主イエス・キリストにおいて親愛なる兄弟姉妹のみなさま。今日は私自身について知っていただこうと思います。おそらく、すでに小教区などで直接お

会いし、お話しした方々もいらっしゃるでしょう。でもまだ出会っていない方々も含めて、もっと私のことを知っていただければと願っています。

私はアントニオ・マチアス神父です。私は今年2024年の4月1日付けで第5地区中通北ブロックの3つの教会、野田町教会、松木町教会、二本松教会を担当することになりました。私はフィリピンで生まれ育ったフィリピン人です。小さいころから学校の先生になることを夢見て、大学では心理学を学びました。そして自分の召命を探し求めた時、エスコラピオス修道会に入会しました。その後、フィリピンにあるイエズス会の大学で哲学と神学を学び、2001年、まだ修道者であった私は日本へ派遣されました。は

じめのうちは日本の文化や言語、生活に戸惑いましたが、それでも神様への信頼を深め、多くの信者さんたちの祈りに支えられて、2005年に終生誓願を宣立し、助祭に叙階されました。ルルドの聖母の祝日である2006年2月11日、私は京都教区の四日市教会で司祭に叙階されました。その後、私は南山大学で神学の修士を修め、教員免許も取得しました。私たちエスコラピオス修道会は若者たちに教育の場を施すことを会の精神としていますので、私は日本の学校教育の場で、特に私たちの会が運営する三重県にある海星中学校と高等学校で16年間にわたって奉仕しました。また10年間、四日市教会の主任司祭も務めました。

私は長い間京都教区で奉仕し、三重県の信者さんたちとの交流をもってきましたが、神様は私に新しい宣教の場を与えてくださいました。それがこの仙台教区です。福島市に来た時、南国生まれの私には想像もできなかった大雪が私を迎えてくれましたが、その雪の中には信仰の光を輝かせるみなさまがいました。仙台キリシタンの信仰を育んだこの仙台の地で、これからはガクタン エドガル司教様、司祭団、信徒のみなさまと共に、福音宣教のために奉仕させていただければと願っています。どうか私が主の僕としてみなさまに仕えることができるようにお祈りください。私もみなさまとの歩みの上に聖霊の豊かな導きがあるように祈っています。

ドミニク・グエン・カオ・トゥリ（エスコラピオス修道会）



- 生年月日
1977年7月17日
- 出身国
ベトナム
- 助祭叙階
2012年8月11日
- 司祭叙階
2013年2月3日
ノバリチェス教区
ホーリー・トリニティ教会
(フィリピン)

司祭を志したきっかけと経歴

私は5人兄弟の2番目に生まれました（女の子3人、男の子2人。姉妹は全員結婚しています。兄もヴィンロン教区の司祭です）。

高校生の頃、私は、キリストを知らない人たちに、福音を伝える司祭になりたいと思っていました。なぜなら、ベトナムではカトリック信者はわずか7%で、神を知らない人がまだ多く、彼らに福音を伝える人が少なかったからです。

高校卒業後（1997年）、私は教区の神学校への入学を申請しました。教区の司祭であるグエン・クオイ・トー神父は、トマス・グエン・ヴァン・タン司教様にお目にかかるために、連れて行ってくださいました。司教様は、私に大学へ行って勉強するように勧めてくださいました。翌年、入学試験に合格し、大学で4年間勉強しました。大学を卒業した時、私は、教区の司祭と共に再び司教様のお会いしました。そのとき司教様から、教区司祭になりたいですかと尋ねられましたが、1週間考えて返事をしてくださいとおっしゃいました。

1週間後、私はエスコラピオス修道会に入会する決心をしました。私と他の3人のベトナム人が、エ

スコラピオス修道会に入会した最初のグループでした。2003年9月20日、私たちはフィリピンに到着しました。しかし、3か月後、3人は退会したので、私だけが残りました。

エスコラピオス修道会のカリスマは、教育です。私は大学で教育学を学んだので、うれしいことでした。フィリピンでは、英語、哲学、神学の修士課程を修了しました。

司祭叙階は2013年でした。2013年～2014年は、ドン・ホセ・インターナショナル・ハウスの国際コミュニティで活動しました。

2014年7月3日、私は日本語を勉強するために日本に来ました。半年ほど私は横浜の戸部教会で、協力司祭として働きました。

東京では、私はエスコラピオスの修道院で他の会員たちと生活しました。東京大司教区のいろいろな小教区でベトナム人のためにミサをささげたり、黙想指導をしておりました。

司祭として大切にしていること

私は司祭になって10年以上経ちました。私にとって最も難しいのは、言葉です。しかし、日本にたくさんベトナム人がいて、彼らのためにミサをささげることが、大変うれしいことです。しかし、これまでの経験で、一番つらかったことは、ある小教区でベトナム語のミサをささげることがゆるされなかったことです。

今、仙台教区で働くことができ、とても幸せです。今の私の司牧活動は、ミサをささげることと、ベトナム人のために働くことです。できれば、もっと、さまざまな小教区でミサをささげることができればと思っています。私はベトナム人のための活動センターがあればいいかと夢見ています。

東北キリシタンのふるさと・・会津〈その2〉

会津最初の殉教から薬師川原の大殉教へ

1590年に会津に入ってキリスト教を広めた蒲生氏郷は、会津入府から5年後に、京都で亡くなりました。キリシタン大名であったにもかかわらず葬儀は豊臣秀吉の強い意志により、仏式で行われました。秀吉は、以下の理由で氏郷にある種の恐怖心を抱いていました。まず、氏郷は織田信長の娘と結婚していたので、氏郷の復権に対する不安が常にありました。次に、氏郷がイエズス会や海外要人の知友も多く、外国文明を積極的に取り入れたので、秀吉に嫌われました。それらの理由から秀吉は氏郷を京都から遠く離れた会津に送りました。このような背景により、氏郷の死には今も謎が残ります。

先号に述べた、ヴァリニャーノ神父に氏郷が会った時に同行していて、受洗したのが、猪苗代城主の岡越後です。彼は熱心なキリシタンで、氏郷の家臣として仕えていました。家族一同も熱心なキリシタンでした。岡越後は、私財を投じて、城の近くに天主堂を建て、磐梯山麓に伝道所（一説には神学校とも言われていますが、伝道所というのが実態でしょう）を建てました。城下の民はほとんどが洗礼を受けてキリスト教徒になったので、そのために地元の寺社では大変困ったとも言われています。岡越後は、1622年まで猪苗代城主を務めました。甥の岡左衛門佐が継承しました。（この1622年には、長崎西坂の丘で幕府によりイエズス会士、フランシスコ会士、ドミニコ会士の計55名が処刑されました。1597年の日本26聖人殉教地と同じ西坂です。）岡越後の後継となった岡左衛門佐は一度は洗礼を受けましたが、天下の趨勢がキリシタンにとって行く先真っ暗であることを察知すると、さっさと棄教してしまいました。そして、左衛門佐は岡越後の家族に辱めを加えようとしたので、越後は一時的に棄教せざるを得ませんでした。この頃、会津では5人組制度（実態はお互いに監視し合う制度）が始まり、キリスト教徒が訴えられたり投獄されたりしました。そして、猪苗代城の財務管理を担当していた、キリシタンのコスモ林主計は、すでに城主だった岡左衛門佐の命令により、1年間の投獄の後に、棄教しないことを理由に、1626年1月25日に、斬首の刑を受けました。



岡越後殉教地記念碑（猪苗代町）

会津に於ける初めての殉教者でした。続いてこの年のうちに、岡越後とその家族全員も殉教しました。猪苗代の土津神社の近くには、岡越後とその家族の殉教碑がカトリック会津

若松教会によって建てられて、1989年11月23日に落成祝別式が行われました。

コスモ林主計や岡越後一家の殉教から5年後の、1631年には、会津藩主加藤嘉明の後を継いだ明成により、イエズス会修道士のジュアン山と62名の信徒が逮捕されて、そのうちジュアン山と15名の信徒が江戸送りとなりました。そして、1632年2月には、8日と12日を合わせて、52名のキリシタンが、若松で火刑と斬首で殉教しました。この時の主だった人物は、会津藩士パウロ柴山長左衛門（火刑）とその妻マリアと2人の子供（ともに斬首）、同じく会津藩士大森喜右衛門、坂本三太夫、中牧主水などの家臣たちでした。そして、翌1633年には江戸に送られていたジュアン山が逆さ穴吊りで、汚物ために頭からつるされて殉教しました。この頃、イエズス会のクリストファ・フレイラ神父が、ついに棄教せざるを得なかったといったことを見ても、この頃の拷問と刑死がいかにも凄まじいものであったかが想像できます。会津若松には当時、東山、大塚山など、5ヶ所ほどの刑場がありましたが、弾圧が一層厳しくなった加藤時代の末期には、会津若松市街地の西端の、薬師河原が主な刑場になりました。この頃までに、キリシタンは子供を含めて74名がここ薬師河原で殉教しています。佐藤 大（まさる）（郡山教会）



薬師河原刑場跡
（会津若松市）

編集後記

教区報は、今号からできるだけ新しい情報をお伝えするために、年間の発行回数を増やして行くこととなりました。（年間4回から6回の発行を目指します。）どうぞよろしくお願いいたします。

仙台教区広報委員会では、皆様から原稿を募集しています。投稿は随時受け付けていますので、下記のアドレス宛てにメールで添付ファイルをお送りください。手紙の場合は教区事務所宛てに郵送してください。（関 毅）

sendaikyoukuho@gmail.com 次号発行予定日：9月22日(日) 原稿締め切り：8月19日(日)